

U-22プログラミング・コンテスト 経済産業大臣賞受賞

おちこうえい  
越智 晃瑛さん(12歳)

「大人になったら、ホワイトハッカーかプログラミング技術で社会の役に立つ人になりたい」と将来の夢を語る、今浜町の越智 晃瑛さんは、大学生や社会人、専門学校生プログラミング教室の精鋭など22歳以下の個人やチームが参加する、昨年の「U-22プログラミング・コンテスト」に独学で制作したソフトウェアでエントリー。見事「プロダクト部門」の最高賞、経済産業大臣賞を受賞しました。



プログラミングは「調べる」「試す」「失敗する」の繰り返し。コツコツ細かい作業をするのは楽しいです、と話す越智 晃瑛さん

- ◆越智 晃瑛さんの主な受賞歴
- ・U-22プログラミング・コンテスト 第41回大会 経済産業大臣賞
  - ・全国小中学生プログラミング大会 第3回大会 準グランプリ 第5回大会 小学校高学年の部 優秀賞
  - ・PCNこどもプロコン 2019-2020大会 ソフトウェア小学生の部 最優秀賞

受賞の点訳ソフトは3年をかけた集大成

コンテストで経済産業大臣賞に輝いた「点体望遠鏡」は、越智さんが3年をかけて開発した集大成の点訳(文字を点字に変換する)ソフトウェアです。

本を読みあさったりインターネットで調べたりしながら、ほとんど独学でソフトウェアを作ってきました。手掛けるソフトウェアの完成度が上がってくると、本やネットの情報だけでは足りなくなっていました。そこで、市に登録している点訳ボランティアの話を聞きに行ったり、視覚障害者センターでテスト利用してもらったり、家族以外の人に助けを求めるようになりました。

緻密な作業、達成の喜びがプログラミングの魅力

上げてきたソフトウェアです。最高賞をもらったのも、越智さんは満足するまでブラッシュアップを続けていくそうです。

越智さんがプログラミングに出会ったのは小学2年生の時。緻密な作業をコツコツと続けるのは楽しくて、プログラミングが思うようにできた時はとてもうれしいといいます。人と話すことが苦手だった越智さんは、プログラミングの魅力にどんどんハマっていきました。

幼いころから色弱と吃音のハンディがあり、通っていた通級指導教室(ことばの教室)の先生にプログラミングコンテスト参加を薦められました。

お父さんにも「コンテストを調べたから応募してみようよ」と励まされて、「U-22プログラミング・コンテスト」などを中心に大会に応募するようになったそうです。これまでも入賞した

ことはありませんが、越智さん自身が「賞」をめざしたことはなっていないです。

今回のU-22で最終審査に残った時は驚きました。人と話すのは苦手なのに、最終審査はプレゼンテーションだったので、練習したけど不安もあった。一番でうまくいってよかった」と振り返っていました。

わが家の優しいお兄ちゃん 大きな賞よりうれしい成長

両親は「宿題が終わったら好きなことをしていいよ」というスタンスなので、越智さんは学校の勉強もプログラミングもほとんど家族の集まるリビングでやるといいます。両親、飼っている猫、妹の千晶さん(小学4年生)にとっては普通の優しいお兄ちゃん。

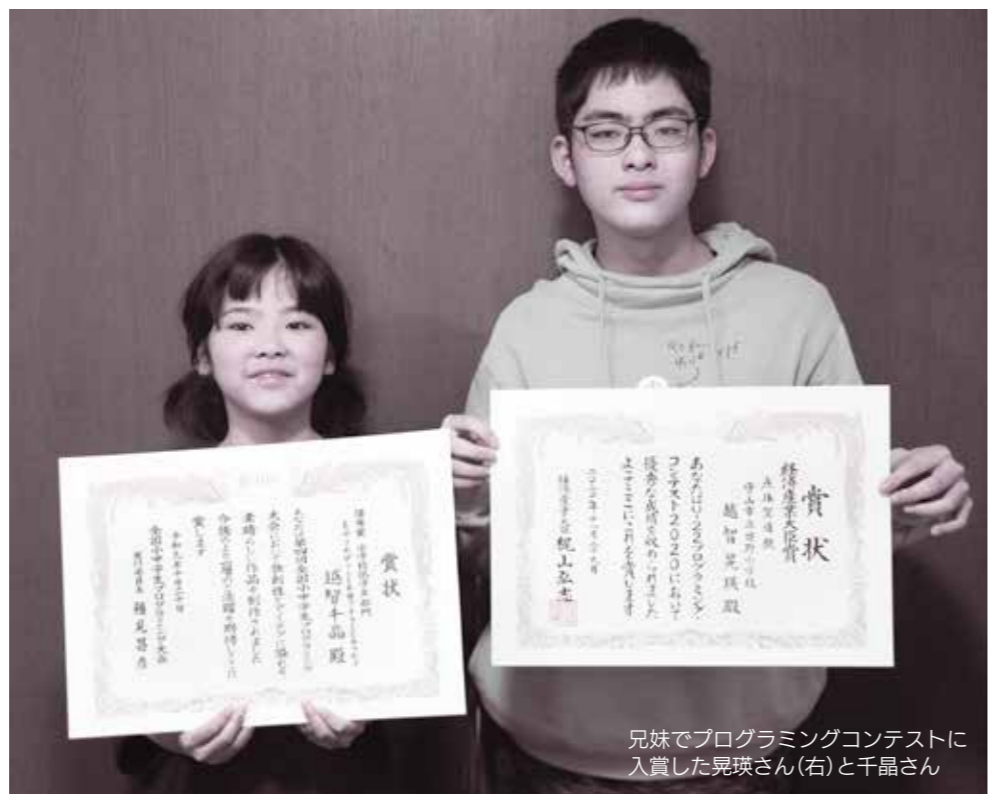
お兄ちゃんを見ていて「楽しそうだな」と、影響を受けてプログラミングをするようになった千晶さんも、「昨年」第4回全国小中学生プログラミング大会」

で優秀賞に輝きました。

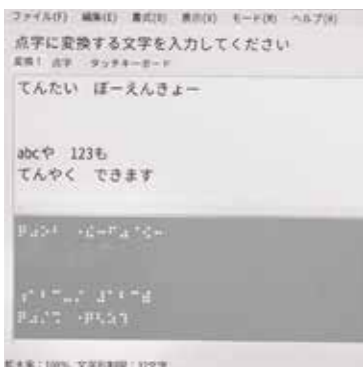
お父さんの仕事はプログラミングと共通点の多い電気・制御の設計士。家族そろってIT系が強いように見えますが、家族共通の趣味は「読書」だとか。

お母さんは「私はプログラミングに詳しくありませんが、プログラミングは物事を正確にとらえ、理解し、的確に指示をする力が求められるので、読書をする中で身につく読解力や想像力が役に立っていると思います。また、人と話すことの苦手な晃瑛が、ソフトの完成度を高めるために家族以外の人に助けを求めて行動した。大きな賞をもらったこと以上に、親としてはそれが一番うれしかったです」と話していました。

この春、越智さんは中学生になりました。小学校を卒業したばかりの春休み、越智さんは「中学生になったら、プログラミングの好きな人たちと友達になりたい」と話していました。



兄妹でプログラミングコンテストに入賞した晃瑛さん(右)と千晶さん



点体望遠鏡の画面



家族が集まるリビングで